

魅力ある建設業を発信するために

～建設業の人材確保・育成に向けた提案～



近年、建設業の中で大きなテーマとなっているのが、人材不足問題です。特に、北海道では55歳以上の建設業就業者が約4割を占めており、次代を担う若い世代の人材確保と育成が喫緊の課題になっています。その一方で、人材確保と育成については中長期の視点で取り組んでいくことも必要です。

そこで、今回は建設業と接点を持ちつつ、外の立場で建設業を見つめておられる皆さんをお招きし、魅力ある建設業を発信するための方向性やアイデアについて、ご意見をお聞きしました。

出席者

- 大澤 賢一 氏 釧路市総合政策部都市経営課政策推進主幹
葛西さとみ 氏 行政書士 カサイ・オフィス代表
梶 邦明 氏 北海道札幌工業高等学校土木科長
コーディネーター
小磯 修二 氏 北海道大学公共政策大学院特任教授

(本座談会は、2016年10月28日に札幌市内で開催しました)



大澤 賢一氏

小磯 建設業は経済活動だけでなく、地域のさまざまな活動を支えている産業ですが、これまでその役割はあまり発信されてきませんでした。今、建設業では人材確保と育成が大きな課題になっています。そこで、この座談会は、外からの視点で魅力ある建設業を発信するためのヒントを与えていただきたいということで企画しました。どうぞよろしくお願いいたします。

大澤 釧路市総合政策部都市経営課におります。これまで建設業と関わる機会はなかったのですが、2年ほど前に工事の発注を担当する総務部契約管理課に所属し、建設業の皆さんと話をすることがあり、経営者の皆さんから今の課題は人手不足だと聞きました。そこで、市の施策として建設業の担い手確保に資するような取り組みができないかと考え、独自の取り組みを進めているところです。

梶 札幌工業高校の土木科におります。教員生活20年で、生徒を育てていく上で企業とのマッチングを考えながらキャリア教育を進めています。国土交通省、北海道、札幌市、建設業協会などにご協力をいただき各種活動を実施し、生徒や保護者の建設業への理解を得られるような取り組みや、卒業後の進路や就職後の定着率なども考慮して、生涯にわたる多様なキャリア形成に必要な能力、勤労観、職業観などを育成できるように、日々生徒と接しています。

葛西 私は行政書士で、主な取引先が建設業です。石狩振興局管内の建設業の新規許可のほか、指名願いや経営事項審査など、建設業に関わるさまざまな代行手

続きを仕事しております。また、昨年、息子が札幌工業高校を卒業し、建設業に就職しました。娘は来春に大学4年になるので、親の立場からも就職や人材育成には関心があります。

担い手不足を行政が支援する「ハタラク」

小磯 では、具体的な活動をお聞きます。大澤さんがおっしゃっていた独自の取り組みとはどんなものですか。

大澤 契約管理課にいたとき、建設業の皆さんはとても控えめだと感じました。でも、まちづくりの中では清掃活動やグラウンド整備、社会貢献活動など、非常に積極的です。そこで、地域にある企業の活動を行政としてサポートしたいという思いから、まず建設業のイメージアップを図りたいと考えました。そこで、雇用政策を担っている産業振興部商業労政課と連携して新しい取り組みを始めました。

地元紙の釧路新聞が釧路市と釧路町の全世帯に配布している『Life』というフリーペーパーがあります。その広告枠を買い取って「ハタラク」というコーナーを設け、建設業で働いている若者のインタビューを掲載しています。建設業で働いているのはおじさんというイメージがありますが、頑張っている若い人たちをクローズアップし、就職先の一つに考えてもらうことや、一般の方向けに建設業をPRすることが狙いです。近所で見かける若者が、こんなに頑張っているんだなど、そこで働く人を通じて、建設業の理解につながればと考えました。土木、建築、大工などの職種ごとに取り上げ、その情報をもとに『ハタラク』というインタビューブックもまとめています。

また、釧路のまちをモデルに建設工事の工程をまとめたパンフレットも作成し、建設会社の経営者にリクルート活動のときに活用してもらえるようにしました。

冊子だけでなく、「ハタラク」のポータルサイトも作り、インタビュー動画も見られます。このほかDVDも作成するなど、一つの情報ソースを有効に活

大澤 賢一 (おおさわ けんいち)

1969年釧路市生まれ。釧路公立大学卒業後、釧路市役所に入庁。福祉部、経済部、港湾部、産業振興部、企画財政部、総合政策部を経て、2014年に総務部契約管理課に所属。16年より総合政策部都市経営課政策推進主幹。

用しています。これらのデザインは若手デザイナーが担当し、明るく、親しみやすいデザインになっています。

この事業は平成27年度から始めて今も継続していますが、今年度はキャリアアップを意識して中堅の人にもインタビューしています。昨年度は国の地方創生交付金を活用しましたが、今年度は市の単独財源で予算化しています。

小磯 地方自治体としては、非常に珍しい取り組みです。どういう理念で進められているのですか。

大澤 釧路市では水産加工業の担い手不足も大きな課題です。そこで、人材確保のPR事業として一つの仕組みを作り、その経験をほかの業種にも転用できないかと考えています。これまで実績や経験がない取り組みなので、業界との連携も時間をかけて進めていく必要があります。その先行例を建設業で始めたことになります。

小磯 人材確保が難しい業種を支援していく先行的な政策ですね。次に、梶先生、お願いします。

現場感を伝え、父母の理解を進める取り組みも

梶 当校では、企業に入ってしっかり定着して働けることを意識して活動しています。例えば、現場見学会では、教員では伝えられないような企業の技術力を見せてもらったり、測量の実習では現場でやっている実際の測量を見せてもらいます。当校は校舎が古いので、壊れたところの補修工事を見学させてもらって、生徒がそこで体験することもあります。現場感を肌で感じられる場面を増やして、建設業とはどのようなものか、どのように社会に役立っているか、企業とも連携を取りながら学ばせています。学校に本物の建設機械がくることがあります。生徒の反応が良く、建設会社の皆さんも当校に来られるときはものすごく張り切ってくださいるので、生徒も「これならやってみたい」と感じる場面が多いようです。学校にやってきた建設会社に入社した例もあります。教科書ではわかりにくくても、工事現場を見ると全く違う実感があるようです。



梶 邦明氏

小磯 梶先生は土木科の所属ですが、土木と建築で何か違いはありますか。

梶 土木は昔ながらのイメージですが、建築は建築士になりたいという生徒が多く、進学者が増えています。土木は今、求人が好調ですが、今後は下がってくるのが想定されます。それでもやっていけるように指導していくことが大切で、情報化やi-Construction^{※1}（アイコンストラクション）に対応した技術に少しでも触れさせたいと思っています。

小磯 では、葛西さん、お願いいたします。

葛西 梶先生のお話につながりますが、札幌工業高校で父母を対象にした建設工事現場の見学会があり、私も参加しました。就職先を決めるのは本人ですが、子どもたちの多くは親に相談します。でも、親もすべての仕事を正しく知っているわけではありません。現場見学で受けた印象が良かったので、自信を持って建設業を勧めることができました。その際、北海道建設業協会が制作した『ただいま工事中!!』という漫画冊子をもらいました。業界団体ではいろいろな冊子を作っており、そこからも仕事の内容を詳しく知ることができました。大澤さんのお話にもありましたが、親や子どもたちに向けてわかりやすく情報を発信することは大切だと思います。

小磯 親の理解を深めることは、重要な取り組みですね。父母対象の現場見学会について、梶先生からもう少し詳しくご紹介ください。

梶 北海道建設業協会と札幌建設業協会のご協力で、

梶 邦明 (かじ くにあき)

1973年夕張市生まれ。北海道帯広工業高等学校、北海道滝川工業高等学校を経て、2013年より北海道札幌工業高等学校。土木科でキャリア教育充実のため、各種活動に取り組んでいる。15年より同校土木科長。



小磯 修二氏

授業の一環として現場見学会を開催しています。就職先については、保護者の理解も重要です。保護者が建設業関係だと問題はありますが、ほかの仕事をしているといまだに建設業はスコップとツルハシのイメージです。そこで、保護者のご理解を得るために現場を見てもらうようと、平成27年度から保護者向けの見学会を始めました。

現場を見学した皆さんから反響が大きかったのは、安全管理や清潔感です。特に、この数年でトイレや更衣室、事務所などの環境が劇的に良くなっています。女子生徒のお母さんは、「こんなきれいな所で働いている」と驚いていました。また、安全性への配慮についてもよく理解されたようで「これなら娘を建設業に出しても安心」と感じてくれたようです。

小磯 現場見学会では、建設業の皆さんの改善への努力を感じますか。

梶 私は毎年のように現場を見てきていますので、最近の激変には驚いています。現場、現場事務所、トイレなどの環境は大変良くなってきています。

情報発信の弱さをどう克服するか

小磯 大切なのは、そういう現場の状況をうまく発信していくことですね。格好いい建設会社のホームページはまだ少ないと思います。

葛西 建設業の皆さんと関わっていると「人材がいな。なかなか人が採用できない」とよく聞きます。ハローワークに求人を出しても応募すらないそうです。

道内の中小企業は、ほとんどが新卒ではなく既卒を採用しています。でも、人材不足は建設業だけではありません。ほかの産業も人が欲しいのです。比較してみると、建設業は情報発信が非常に弱いと感じます。

求職者は求人票を見てインターネットで会社のホームページを検索し、どんな会社か確認した上で応募する行動パターンだと思います。大手は別ですが、中小企業の建設業は、ほとんどホームページがありません。だから、求職者の候補に挙がらないのです。

建設業の専門工事業は、技術を身に付ければ起業できる魅力的な職種です。30代くらいの若手の前向きな経営者の皆さんは、将来の人材についても非常に危機感を持っており、ホームページを作ってブログを掲載し、日々の工事について記事を更新したりしています。世代交代が進むと、建設業界は劇的に変わってくると思っています。

小磯 建設業はものづくりなので、それを素敵な写真などで発信できれば、イメージが変わってきます。

葛西 先ほど大澤さんも言われていましたが、建設業の皆さんはとても地域に貢献しておられます。でも、意外と一般の人はそこを知りません。もう少し社会貢献度の高さをPRして、地域に認知してもらうことが必要ではないでしょうか。

大澤 建設業の皆さんはとても控えめで、自らアピールするのが苦手なように思います。

葛西 13年ほど行政書士をしています。今は大きな波が来ていると感じています。それは、法令遵守と現場の安全や衛生対策です。これは経営者にとっては死活問題です。労働基準の順守はもちろん、小さな事故でも会社を潰しかねない状況にあり、労働環境や安全面などは非常に気を遣っています。これまで3Kと言われてきましたが、改善への取り組みがされており、将来が楽しみです。建設業が変わっていく姿を見てもらえると、今までの3Kイメージを払拭できるのではないかと期待しています。それには時間もかかりますし、地道な広報活動も必要です。一社だけではできな

小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

1948年大阪市生まれ。京都大学法学部卒業後、北海道開発庁（現国土交通省）に入庁。99年釧路公立大学教授、地域経済研究センター長。2008年同大学学長。13年9月より北海道大学公共政策大学院特任教授。公職に国土審議会専門委員など。

いことで、業界と行政、地域などが一丸となって取り組むべきだと思います。

建設業は他産業と比較して給与単価が高いです。また、専門職としての技術を身に付けると、独立開業できるやりがいのある仕事です。地図に残る仕事だということも誇りになります。

大澤 そこが大きな魅力です。行政は設計図を描けても、実際に造り上げていくのは建設業の皆さんです。

葛西 建設業の皆さんから「あのダムは俺が関わった」、「あのビルはうちの会社で塗った」、「ここは俺が除雪している」とお聞きすることがあり、自信とプライドを持っていることを感じます。そんな良い面をアピールしてほしいと思います。

小磯 建設業の醍醐味は、自分が手掛けた構造物や施設がそこにあることです。その面白さを伝えていく方法や仕組みの工夫が必要ですね。また、建設業は地域社会を支えている産業ですが、これも大切な要素で、やりがいや生きがいにつながります。昨年の夏に大きな台風被害がありましたが、あのとき現場の最先端にいたのは建設業の皆さんです。災害時に地域を守っているだけでなく、お祭りをはじめ、日常の催事を裏で支えているのも建設業です。

梶 災害復旧でテレビに出るのは消防や自衛隊、あるいはボランティアの人たちですが、夏の堤防決壊では夜通しで復旧作業をしていたのが建設業の皆さんです。でも、そういう場面はほとんどテレビには映りません。最前線で頑張っている人たちを知ってもらえれば、建設業で働いてみたいと思う人もいるはずですよ。

大澤 釧路市も地震が多いので、災害対応を肌身で感じようと、市内の建設会社の経営者が社員を連れて熊本に災害復旧ボランティアに行ったと聞きました。そういう企業のことも紹介できるといいと思います。地域の中にこれほど地元のことを考えてくれている建設会社がある。こうした取り組みは、誰かが伝えられない限り、伝わりません。

小磯 建設業の現場は地域なので、地域の事情に精通



葛西 さとみ 氏

しています。その経験が災害時に生きてきます。それを産業の特性としてとらえ、魅力として伝えていくことも大事です。

ワークライフバランスと女性の活躍

梶 葛西さんの給与のお話のように、高卒の土木技術者の賃金も上がってきていますが、課題は拘束時間です。日曜日は休めますが、土曜日には仕事がある場合が多く、現場の仕事の後は事務処理があり、拘束時間が長いと思います。ですから、次のステップは休日の確保と拘束時間の短縮です。例えば、建設現場に事務処理専任スタッフを置くなど、方策を考えるべきだと思います。工期など、発注側との調整も必要です。

小磯 働くことの醍醐味や魅力と同時に、ワークライフバランスを保てる環境整備も大切な視点です。それを見据えて建設業のあり方を考えていく必要がありますね。

梶 業界団体や国、自治体などが一緒になって考えていかなければならない問題だと思います。

小磯 建設業は請負業なので、発注側の国や自治体などが、建設業にどういう仕組みで関わっていくのかも考えなければなりません。建設業の人材が増えていた時代は、今よりはるかに高い給与体系だった歴史があります。

梶 バブル時代には拘束時間の賃金がいっしょに出ていると思います。働いている方々は、建設業は魅力のある仕事だということが一番よく理解しています。でも、

葛西 さとみ (かさい さとみ)

中富良野町生まれ。北海学園大学法学部卒業後、日本生命保険(相)入社。2003年に行政書士カサイ・オフィスを開業し、現在に至る。10年小樽商科大学MBA修了。現在、北海道大学公共政策大学院在学中。

拘束時間が長すぎて、家族サービスができないという理由で違う業界に転職した卒業生もいます。拘束時間の問題が解決できると、もっと魅力ある職場になると思います。

そこで、大きなポイントになるのが、ICT^{**2}です。これから働き手は必ず少なくなり、情報化施工^{**3}が主流になります。10年後、20年後に先頭で頑張っている技術者が今の生徒たちなので、少しでもその力を付けて卒業させたいと思っています。今後はi-Constructionについても学べる環境を整えたいと思っています。

小磯 最近は、重機もIT化されて力がなくても操作できるので、女性が担っていける分野がかなり広がってきています。

梶 今後、女性技術者は増えていくと思います。土木科も建築科も女子生徒が増えています。女性を採用する企業も増えてきました。ただ、まだまだ問題はあります。大きな問題は企業がこれまで女性技術者を採用した経験が少ないことです。現場や事務所に女性が入ると、どう対応してよいのかわからないようで、結果的に過去に採用経験のある会社に行ってしまう傾向があります。

葛西 建設業を陰で支えているのは、女性だと思います。職場の中の経理など事務職だけでなく、経営者や社員の奥さん、独身社員のお母さんなどが支えています。

大澤 女性は地元志向が強いと思うので、就職先として地域の建設業の事務職にも目を向けてもらえると思います。

葛西 今後は、女性をもっと主役になれるような役割を担っていけるといいと思います。図面管理や写真撮影、報告書作成のレイアウトなど、センスが生かされるような場面に女性を配置すると、意外と力を発揮するのではないのでしょうか。

大澤 「ハタラク」でも造園会社に勤めている女性を取り上げる予定です。

幅広い世代が建設業と触れ合う場を

小磯 幅広い世代が建設業を知る機会も必要ですね。

大澤 今年度は「ハタラク」だけでなく、もっと若い世代の中学生向けのPRも考えていて、釧路市建設事業協会さんでは、中学生を対象にした建設業の作文コンクールを企画しています。金賞を受賞した子どもと親に夏の東京視察を副賞として授与し、国土交通省の「子ども霞が関見学デー」に参加してもらおうと考えているようです。建設業のことがわかるようになれば、家庭でも話題が盛り上がるのではないのでしょうか。また、今年度は『くしろ冬まつり』で子ども向けの除雪教室も企画しています。雪で小山を作って制限時間内に除雪するゲーム形式のものを考えていて、建設業界と市が連携して取り組んでいきたいと思っています。

小磯 小さな頃から建設業に触れる機会は大切ですね。ところで、自治体が建設業を支援することについての抵抗はなかったのですか。

大澤 ありましたが、現場や業界とも検討し、どのように事業につなげていくかを話し合っ、皆さんの理解が得られたからこそ、ここまでできました。

小磯 自治体の建設業支援のモデルになるといいですね。ところで、札幌工業高校は開校から100周年だとお聞きしました。

梶 当校はこれまで3万人近い卒業生を送り出しています。土木、建築、電気、機械の4科があり、札幌市内の企業にはたくさんの卒業生がいます。その皆さんに助けられて、求人も多いのだと思います。

教育面では新しいことを教えていくことも大切ですが、まず基礎・基本をしっかり学んでもらいたいと考えています。また、企業には一人前の仕事ができるようになるまで、育ててもらいたいという思いもあります。幸い、最近はこんなことをしてほしいと思っていたことが、ずいぶんと実現しています。今までは入社するとすぐに一人前扱いされてしまい、そのために2、3カ月で辞めてしまう卒業生もいました。しかし、最近入社から数年は様子を見てもらっているようで

す。非常に親身になって対応してくださり、指導担当者もつけてもらっているようです。入社後に遠いところに出張に行かなくてもよいように、自宅から近い現場を担当させてくれるなど、少しずつ現場に馴染むように気配りしてもらい、その結果、定着率がものすごく上がっています。

道内の建設業者はしばらく採用を控えていた企業が多く、年齢構成がいびつです。ただ、不景気な時代を乗り切った企業が残っていて、新しい職員を採用しないと人材不足で仕事が取れないことになるという危機感を持っているようです。企業も大きく変わってきており、学校としても安心して卒業生を送り出せる環境が整ってきました。

大澤 釧路市は炭鉱会社や製紙工場があるので、大型の機械プラント分野の企業がありますが、その分野も人手不足です。そこで今年度から、釧路高専の協力を得て、授業の一環として、機械プラント分野の企業を紹介する場を設けることができるようになりました。業界と高専の間を行政がつないで、地元企業と学生(学校)の交流の場を設けたような感じです。

梶 本校にも行政の皆さんがたくさん来てくださり、そういう場は設けています。特に、札幌は北海道開発局札幌開発建設部、北海道、札幌市といろいろな組織があるので、それぞれで会議があります。ただ、いろいろな取り組みは一つにまとめると、効率良く進められるのではないかと考えています。

大澤 今回、取り組みを行う機械プラント分野の会員企業が5社だったので、対応は迅速です。まずはミニマムなネットワークで実績と成功事例を作って、そこから電気や建築などに広げていきたいと思っています。企業数や関連組織が増える前に、小さな取り組みから経験値を高めていきたいと考えています。

梶 企業は対応が早いと思いますが、教育現場は特殊で、何か依頼があってもすぐには対応できないことがあります。そういう背景をご理解いただければ、教育現場ともうまく付き合ってもらえると思います。

葛西 釧路市の建設業を支援するPR事業は先進的です。こういう動きが各地域で起こってくると、大きなうねりになるのではないのでしょうか。

小磯 北海道開発局、北海道、札幌市、そして業界がみんなで一緒にやろうという機運が出てきているので、人材不足問題もその中でしっかりと取り組んでいくことが大切です。また、建設業の大きな特性である“ものづくり”に対して、社会的な認知を図り、政策としてもしっかりとそこを踏まえて取り組んでいくことが大切です。日本では、なぜか製造業だけがものづくりというとらえ方ですが、地域を舞台にしている建設業こそ壮大なものづくりを担っています。そういった魅力をしっかりと伝えていくことが、第一歩だと思います。

皆さん、今日はありがとうございました。

※1 i-Construction (アイコンストラクション)

ICT(情報通信)技術の全面的な活用、全体最適の導入、施工時期の平準化などによって、建設現場の生産性向上を図る取り組みのこと。

※2 ICT

Information and Communication Technologyの略で、情報通信技術。

※3 情報化施工

ICT(情報通信)技術を活用して高効率・高精度な施工を実現するもの。生産性向上や品質の確保などが図られるメリットがある。

※ 参考

・「マルシェノルド」(開発こうほう 地域経済レポート特集号)2016年9月号「地域の建設業を考える」

・「開発こうほう」2015年12月号「座談会：地域とともに生きる建設業」